

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 月 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県串間市幸島
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
生態学野外実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 4 月 24 日 ~ 平成 26 年 4 月 30 日 (7 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター幸島観察所、鈴木崇文氏
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>4 月 23 日から 30 日までの一週間、下記のような日程で生態学野外実習 (幸島実習) に参加した。幸島は宮崎県の南部に位置する島であり、イモ洗いをするサルでその名を知られている。現在、島には 2 群、約 110 頭のニホンザル (<i>Macaca fuscata</i>) が生息する。このニホンザルに対しては 3 kg の小麦が週 3 回、給餌されている。今回の実習は各々が独自のテーマを定め、観察あるいは実験を行いフィールドワークの手技を身に着けることが目的であった。この実習は辻大和先生、田中洋之先生のご指導の下、鈴木崇文氏にご協力いただき行われた。</p> <p>4 月 24 日 15 時半頃：観察所着、鈴木氏からレクチャーを受ける  4 月 25 日 午前：幸島でのデータサンプリング① (9 時 15 分頃幸島着)  午後：観察テーマについてのディスカッション  4 月 26 日 午前：幸島でのデータサンプリング② (8 時 45 分頃幸島着)  4 月 27 日 午前：都井岬での野生馬の観察とビジターセンター見学  15 時 - 16 時半：統計レクチャー  4 月 28 日 午前：幸島でのデータサンプリング③ (9 時頃幸島着)  午後：発表準備  4 月 29 日 9 時 - 13 時頃：発表会  4 月 30 日 午前：幸島での観察  13 時半：観察所を発つ</p> <p>◆幸島での調査の概要  母親や他のオトナ個体は子どもに対して寛容な態度をとることが知られている。しかし、研究の多くは食物分配が起こるかどうかを指標としたものであり、食物分配以外の場面で、幼少個体に対する応答を調べた研究はあまり行われていない。そこで、幸島での調査は「同種のおとなと子どもの視覚・聴覚刺激に対するサルの応答」というテーマで実験を行った。実験 1 - 3 とも、麦とともに刺激を呈示し、各刺激へのサルの応答を調べた。実験 1 ではニホンザルのオトナの顔刺激、アカンボウの顔刺激、コントロールの視覚刺激を呈示した。実験 2 では実験 1 と同じ視覚刺激に加え、オトナかアカンボウの音声刺激を呈示した。実験 3 では、音声刺激のみを呈示した。</p> <p>実験 1, 2 に関しては各刺激エリアに対する滞在頻度と一回当たりの平均滞在時間に関して分析したが、「オトナ」、「アカンボウ」、「統制」のうち、統計的に有意な差が見られた組み合わせはなかった。実験 3 では、サンプル数が不十分であったため、統計にかけることはしなかったものの、音声に対し、「逃げた・引き返した」個体はオトナ音声条件では 6 個体中 1 個体であったのに対し、アカンボウ音声条件では 16 個体中 5 個体であった。実験 3 の結果は、アカンボウ音声 (ぐずり声) に対してオトナ音声 (威嚇音) 以上に注意を払っていることを示唆していると考えられる。無害なアカンボウをオトナ以上に警戒するのは一見非合理的に思える。しかし、自分の子が他個体から攻撃され悲鳴を上げると母親がかけつけ、攻撃した個体を追い回す、というような状況を考えると、アカンボウのぐずり声が潜在的な危険となっていた可能性、つまり、アカンボウを攻撃したと他個体に「誤解」され、攻撃をうける危険性を感じたための行動であったのかもしれない。実際、アカンボウ音声条件では、周囲に他個体がいなくても関わらず、ちらちらと周りを窺いながら麦を採食する個体があった。</p>
<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: <a href="mailto:report@wildlife-science.org">report@wildlife-science.org</a>

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

アカンボウ刺激に対する応答の理由についてはあくまで推測の域を出ないが、今回の結果は個人的にはとても興味深かったため、今後自分の研究に生かせればと思った。



実験に用いた視覚刺激



刺激の前にまかれた麦に集まるサル(撮影:辻先生)



実験風景(撮影:田中先生)

### ◆都井岬

都井岬には100頭ほどの野生馬が生息しており、岬馬として知られる。ビジターセンタースタッフの方のガイドにより、ビジターセンター見学と岬馬の観察を行った。岬馬は知識として知ってはいたものの、実際に数メートル先は見えないような深い霧の中で馬の群れが佇んでいる姿は幻想的で、野生の馬がすぐそこにいるというのは不思議な感覚であった。オスが自分の群れのメスの糞に尿をかけて匂いを消すという行動や争いの後に糞をすることで一時的ななわばりの境界線とするという行動など、特有の社会的行動を行うという話に興味を持った。また、馬は形を変えずにゆっくり動くもの(近づいてくる車など)を動いているとは認識しないらしい。ウマをはじめとする草食動物は左右の視野の重複する範囲が狭く、狩猟をするライオンのような動物に比べて奥行き知覚が弱いという教科書的な説明とも一致する。ウマの認知に関する研究は始まったばかりだが、彼らにはどのように世界が見えているのか、興味は尽きない。

### ◆実習全般

天気に恵まれず、一日も幸島に渡れないという最悪の事態も予想されたが、滞在期間中、四度も幸島に渡ることができたのは幸いであった。それでも波が高くなる前に帰る必要があったため、どの日も昼には観察所に戻らなければならなかったが、午後統計レクチャーを受けたり、周囲の自然を楽しんだりと充実した時間を過ごすことができたのは有意義であった。夕食はお寿司や餃子などをみんなでにぎやかに作り、自由時間には一足早い海も楽しんだ。ただただ、楽しいの一言に尽きる一週間であったが、フィールド実験や岬馬の観察は新たな研究の可能性を広げてくれた。



船に乗りこむサル



晴れた日はどこまでも青い景色が続いた

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



岬馬



木に登り浜を見下ろす



最終日の打ち上げ（撮影：田中先生）

## 6. その他（特記事項など）

本実習は PWS リーディングプログラムにご支援いただき行われました。実習中は辻先生、田中先生、鈴木氏に大変お世話になりました。